

カンツォネッタ (Canzonetta) IV

倉橋重史

待つということ

Juli 11 1999

人間は誰でも待つ経験をする。待ったことのない人はいない。待たせる時もあり、待つときもある。しかし出来るなら待ちたくないと思う場合がある。大病院で待たされる時である。痛くてしんどいから病院で診察を受け、早く治療してもらうために来ている。すぐ診察し治療を受けたいが大勢の患者さんとその付き添えらしき人々が待っている。待っても待っても自分の番が来ない。後で来た人が呼ばれて診察室に入っていく。看護婦に訊ねたら診察券を早朝6時頃に出している人々とのことであつた。病院に行くのに未明から起きなければならないとは呆れる。

病院の待時間のことは置いて、待つという言葉から連想するのは、「待てど暮らせど来ぬ人を」の宵待ち草の歌詞であり、ゲーテの *Warte nur, balde, ruhest du auch* という歌である。それは *Über all Gipfern ist Ruh, In allen Wipfeln spürest du kaum einen Hauchn; Die Vögelein schweigen im Walde* につづく歌詞である。「山の頂に憩いあり、木々の梢に微風の動きも見えず、鳥は林に声をひそめたり、待てしばし汝も休まん」という意味である。この歌は1780年9月ギッケルハーンの山頂にあるヴァイマール侯の山荘を訪ね、その壁に書いたものといわれ、50年後80才をすぎたゲーテが再びこの山荘に来て自分の詩を見て深い感動に打たれたといわれている。

さて、ここでは待つという行為を社会学的にどうとらえることができるを考えたい。待つという行為は日常的であり、かつ一般的である。それは社会的現象として日常世界にどこでも何時でも経験することである。しかも待つという行為が成立するのは待つ人がいるからであり、待たれる人や、もの、金、情報

がそこに前提となつたいるからである。したがって待つという行為は勝れて社会学の研究対象となりうるものである。だが待つという行為を社会学の俎上にて料理した研究は少ないのではないだろうか。そこで待つことを社会的にみたら面白いのではないかと書いてみた。

かつて私は人間の行為を遊ぶ、働く、休む、祈るという4つに分けてとりあげたことがある。またそれは待つ、待たせる、出会う、別れるなどの行為として取り扱うこともできよう。ところで、待つことの内容は多様である。人を待つ場合もあり、報せを待ったり、ものを待ったり、出来事やチャンスを待つなどがそれである。人を待つときも楽しい期待にふくらむ時もあり、待つのが嫌な場合もある。報せも善きおとずれもあり、訃報などのような悲しい報せもある。善いことが起こるであろうと期待をもって待つ人もあり、そうでない人もある。このように人は多く待つことを繰り返しながら生きている。それが人生である。だから待たされた人、待たない人は悲しい人であるということもできよう。

人を待つ場合、そこには待たせる人と、待つ人の関係が前提となっている。その関係は既知の場合もあれば、未知の場合もある。既知の時はすでに両者はそれぞれについてなにがしかの情報を持っている。そこには何かについての待つ、待たせるの関係がすでに成り立っている。これに対して未知の人同志の待つ待たせるの関係には不測のものが入り得る可能性がある。それを防ぐために前以て待つ人に自己紹介をしたり、待つための条件を知らしておくことが必要になる。それをしながら、かつてボストン空港で未知の人が迎えにくると言いながら、来ず、大変難儀した苦い経験がある。

待つ人が現われない場合は時間が長く感じられ、焦燥感におちいるときもある。約束の時間におくれそうなときは携帯電話で報せることができ便利になったが、その手立てがない場合は待つ人も待たせる人も苛苛したり、気が重くなる。だが待つ待たせるの間には次のような場が考えられる。待つ人が待たせる人の気持ちを思い、かつ待たせる人も待つ人の立場になって考えている場合である。この場合は待つと、待たせる行為には共通項が存在する。これとは逆に両者に待つ、待たせるの思いが希薄な場合がある。そのような場合は待つ人と待たせる人には共通項が薄い。そしてこれらの二つの間に、待つ人に待つ気持ちが濃厚な場合と待たせる人にその気持ちが強い場合と、その逆の場合がある

であろう。そのような状態の組合せが待つ、待たせるの関係を複雑にし、また面白くさせているのである。

さて以上は待つ待たせるという行為の主体について述べたのであるが、待つ、待たせるの関係が決して平坦なものでなく起伏に富むのは、その関係を取り巻く他の条件が多様であるからである。double contingency と呼ばれる状況はこれをあらわしている。相手の出方次第によって自分の行為は変わってくる。待つ人と待たせる人の状況次第によって待つことと待たせる行為は変化するの は当然である。待つ人が待っている人と出会えるのはこのコンティンジェンシーが減少するという現象に他ならない。

人は人を待ち、報せを待ち出来事を期待して生きていくが、最期はお迎えを待つことになる。いわゆる来迎である。臨終のさい、仏や菩薩が迎えにきてくれることである。それは希望であり期待である。また大衆を救うために仏が迎えにやってくださるという信仰である。来迎図が多く描かれ、拝まれ、鑑賞されていることはその期待と信仰のゆえである。お迎えとはよい言葉である。しかしお迎えが何時くるかは解らない。突然のお迎えの場合待つ準備はない。予期できるなら準備をしておかなくてはならない。身辺の整理であるが、より大切なのは心の準備であろう。

ハイデガーは「期待の役割は本質的に実現を待つこと」とであるとし、「現実的なものから出て現実的なものを目ざすことによって、可能的なものは現実的なものへと、期待どおりに引き入れられる」のであるが、「死への存在としての可能性への存在は、死がこの存在において、この存在にとって、可能性として露われるように、死に対して態度をとらなければならない」ことを指摘している。そして「可能性としての死への存在の最も手近い近さは、現実的なものにとって、可能であるだけに、それだけ遠い」と言っている。このパラドックスに気付いているか否かが死の場合、待つという行為において本質的な問題かもしれない。なぜなら死はいかなる行為も、どのように実存することも「不可能にする可能性」(Möglichkeit der Unmöglichkeit) であるからである (Sein und Zeit, Max Niemeyer Verlag 1986, S.261-263『存在と時間』上 桑木務訳, 岩波文庫 昭和41年 252-4頁)

雲の話

Juni 28 1999

先日ある会のメンバー達と奈良の当麻寺に行った。初めてであった。三重の双塔が新緑に囲まれて美しく聳えていた。見通しのよいところに建つ薬師寺の双塔の佇まいとは違った趣があった。その塔を眺めていると、仲間の一人が天空に太陽が大きい暉（かさ）ができているのに気が付いた。すばらしい暉であったので見とれた。それが見えると天気は下り坂になると聞いていたが、翌日も晴れであった。

帰宅して気象学の古い本を見ると太陽と月の暉のことに触れていた。しかし平板な説明であった。念のため『広辞苑』を見ると、それはうすぐも（絹層雲）に覆われたときでやすく、空中の微細な氷の結晶からなる雲に光が反射、屈折してこの現象が起こると書いてあった。そして暉には半径22度のものと44度のものがあると記されていたが、なぜそれらの角度になるのかという説明はなかった。気象学の本にはその説明があるのであろう。しかし手元の書物をみたが角度については説明がなかった。別の本を繙くと、雨になりやすいというのはこのうすぐもが6km上空にあり、その雲の1,000km位い後方に雨雲があり、暉があらわれてから徐々に低い雲に覆われるようになるから雨が降る確率が高くなり、翌日は60%が雨になると書いてあった。

気象については子供の時から関心があった。雨はなぜ降るのか、雪はどうしてできるのかといった子供のたわいない疑問から自然に生じてきたのである。霧や露、霜、霜柱などの発生のメカニズム、気温、気流、風の強弱、方向、雲の形など、それらの情報は日常生活において必要であったからである。戦時中好天のとき空襲警報が多いように思ったのは、攻撃目標がはっきり見えるからであろう。戦争と気象情報が密接な関係を持っていたからである。諸葛孔明が軍略に秀でていたのは気象情報の読みの深さと関係する。戦時中おんぼろラジオで「モッポ気温20度、南西の風、風力3、気圧何ミリバール」などという気象通報に接した。戦後韓国の友人を訪ねて韓国の光州を訪ねたとき、近くのモッポ（木浦）まで足をのばしてそこの気象観測所の跡を見た。これも気象に興味を持っていたからであろう。木浦まで一緒に行ってくれたその友人は今亡い。

私がMITの研究所にいたとき、彼はボストン大学にて研究していたが、その折りのことや木浦のことが懐かしく思い出される。

雲はわれわれの生活に大きい影響を与える。とらえどころのないさまをさして「雲をつかむような」という。また男女の間柄を「雲となり雨となる」と表現する。たしかに雲は千変万化する。雲の形も変転極まりない。漢詩は白雲や雲の様子を多くうたっている。印象派の画家たちもそのような雲のありさまをとらえ描いたのである。もちろん気象学者は雲をとらえようと試みた。それが雲の分類に現われている。いわゆる雲級 (the classification of clouds) である。巻雲 (略号は Ci, 以下同じ)、巻積雲 (Cc)、巻層雲 (Cs)、高積雲 (Ac)、高層雲 (As)、乱層雲 (Ns)、層積雲 (Sc)、層雲 (St)、積雲 (Cu)、積乱雲 (Cb) の10種である。巻雲、巻積雲、巻層雲は高いところの上層に現われる雲である。極地方では3-8 km, 温帯地方では5-13 km, 熱帯地方では6-18 kmの高さである。高積雲は中層に現われ、極地方では2-4 km, 温帯地方では2-7 km, 熱帯地方では2-8 kmという。積層雲は地表に最も近くにある雲で、下層の雲で地表から2 km程度の高さにある雲である。これらに対して高層雲と乱層雲は中層に見られるが、前者は上層にまで達している雲で後者は上層および下層にまで広がっている雲である。そして積雲、積乱雲は普通下層にあるが中・上層まで達している雲である。その基準は雲がある高度を水平的に保っているか、高度に関係なく重層的・上下的に広がっているかにある。敢えて簡単にいえば平面関係か上下関係かによる区分であろう。

この雲級の分類はいわゆる形式社会学の学者といわれているヴィーゼ (Leopold von Wiese) の *Allgemeine Soziologie* の第1巻の巻末にある Tafel der menschlichen Beziehungen in soziologischer Betrachtung の表と記号を連想させる。彼は社会過程を接触の程度によって結合Aを接近 (Aa), 適応 (Ab), 均衡 (Ac), 合一 (Ad) に分け、分離Bを競争 (Ba), 対立 (Bb), 闘争 (Bc) に区分した。そしてこれらを第一部として、一つあるいは若干の社会形象を背景に行なわれる過程を第二部として、それらを分化過程C, 統合過程D, 破壊過程E, 建設過程Fの4過程に分類し、分化過程を不同意の成立 (Ca), 支配と隷属 (Cb), 等級化と属化 (Cc), 淘汰と個性化 (Cd) に、統合過程を画一化 (Da), 配列 (Db), 社会化 (Dc) に、破壊過程を搾取 (Ea), 恩恵と

買収 (Eb), 形式主義と固定化 (Ec), 商業化 (Ed), 過激化 (Ee), 錯行 (Ef) に、そして建設過程を制度化 (Fa), 職業化 (Fb), 解放 (Fc) に分けた (ibid. Teil I., S.51-56) だがヴィーゼのこの分類は煩瑣であり、雲級のようにすっきりしない。

さらにこの雲級は社会階層を思い浮かばせる。周知のように社会学では social stratification を社会成層と訳し, stratum を階層と訳しているが, stratification とは地質学では大地の成層である。社会成層は成層圏を連想させるが、そのように考えることはあっても、そこで雲の層を想像しているとすれば間違いである。大気の成層圏は stratosphere である。雲は地表から12km 程の大気の層である対流圏にあり, 成層圏には当然雲はない。成層は雲のない成層圏やそれ以上に高いオーロラが現われる大気圏より大地に近い対流圏に馴染む。われわれ人間は空気の底に住んでいるのである。そこで経済力や支配力, 社会的評価, 社会的地位などを気にしながら齟齬と生活しているのである。まさに雲は「天と地との間 Zwischen Himmel und Erde」にあり, われわれは地上を這って生きているのである。

そのような人間にわれを忘れさせ, 一時の安らぎを与えてくれるのが雲であり, 星辰である。古来詩人は白雲をうたい, 雲の流れに感嘆した。現代人は地表をみることは多いが, 天空を仰ぎ見ることは少なくなったのではなかろうか。また大気の汚染は雲への無関心を増殖し, 不夜城をはこる夜の街の灯りは夜空の範囲を狭めている。空を見上げると雲の形や流れ, 星の輝きや星座がわれわれの心を洗い, 詩情を思い出させる。

ちなみに日, 月が暉を作る巻層雲は絹層雲とも言う。絹層雲とは絹のように見えるので美的な表現で好きであるが, 巻層雲は英語では cirrostratus という。cirrus は巻き髭状態を意味するからである。暉が見る人にたいして常に22度であることは何故か, 気にかかっていたが, その答えは大気中の水の結晶が細長い六角柱で, 太陽の入射光が41度であると六角柱を通した屈折光が22度になるという説明があった。そしてこの六角柱が水平方向に揃って大量に雲中に存在する時, 暉ができるとのことである (桜井邦朋『自然の中の光と色』中公新書 32頁。1991年) だがなぜ入射光が41度で屈折光が22度になるのかという疑問は解けない。ともあれ六角柱が水平方向に揃うという現象は稀にしか起こ

らないであろう。とすればあの時に暉というショーが見れたのは幸運であったことは確かである。

浦島太郎の話

Sep. 8 1999

先日ある会で「浦島太郎考」という題で話す機会があった。その概要を記しておきたい。浦島太郎の物語はほとんどの人が知っているものである。「昔昔浦島は助けた亀に連れられて、竜宮城に来てみれば、絵にもかけない美しさ」という文部省唱歌にある通りの内容である。ちなみにこの歌詞とは別に「むかしむかし、うらしまは、こどものなぶる、かめをみて、あわれとおもい、かいとりて、ふかきふちへぞ、はなしける」という石原和三郎の歌もある。

その物語は文学や風土記の研究などからも多く取り上げられている。『日本書記』、『丹後風土記』、『万葉集』などに載っている。外国で同じような話はワシントン・アービングの Sketch Book のなかで Rip van Winkle の話として出てくる。浦島太郎の物語には報恩物語、仙郷説話、宝物物語の三種が含まれているという。かつて丹後、京都府与謝郡本荘村大字本荘浜にある宇良神社に行ったことがある。そこでいわゆる玉手篋なるものを見せてもらった。立派な篋の中には櫛などが入れてあった。化粧篋ではないかと思った。

なぜ浦島太郎の話を持ち出すかという、この夏友人の勧めもあって、20年振りにボストンを再訪したからである。この古都はかつて研究のために単身で下宿生活を送っていたところで、懐かしい。私のいたMITのCIS (Center for International Studies) の研究所の前に立派なホテルが建っており、その窓から研究所の全景を見ることができた。このホテルに宿泊できたのは、友人がこの懐かしい場所が私に気に入ると配慮してくれたからである。着いた翌朝は日曜日であったが、早速大学の構内を散策した。あの建物もこの道も、あの木々も懐かしい。チャールズ川の流れも風景も余り変わっていない。時間が止まったような錯覚を覚えた。だがよく見ると新しい建物が建ち、道路ももっと広がったと思ったり、方角が多少違っているように感じる。研究所の近くにあるスローン・ビルディングも方向がずれていると思い違いしたり、建物の外観も記憶のそれとは異なっているようである。長年の歳月が記憶を不鮮明にして

しまっているようである。

ボストンの街を歩いていても戸惑いが生じる。それは浦島太郎になったような錯覚である。確かに20年という歳月が経過している。過去のボストンは今ない。だが今も存在する。変化したところと変化せずにいるところが共存する。何が変化したのか。変化したと思ひ感じる自分であるかもしれない。では何を基準に変化したと思ひ感じるのか。時間と空間である。

P. A. ソローキンは時間と空間を、物理的、生理的、心理的および社会的・文化的な時間、空間に分けた。浦島現象はそれぞれの時空間の関連がずれたり、不適応になったとき起こるのではないかと考えた。そのずれが弱い場合はすぐ元にもどるが、強い場合はなかなか元に戻らない。そのとき現在からみた過去と、過去から見る現在の距離がありすぎると感じる。あるいはそのように意識するのである。

浦島太郎は遠いところの竜宮に行った。そこでこの世のものとは思えない楽しみにふけた。そしてふと我にかえり元住んでいたところに帰りたくなり帰ってきた。そして忠告をおかして筐を開けてみると急に老人となった。そこには時間に関していえば行った竜宮においても、帰ってきた故郷においても過去の忘却と過去への執着がみられるし、若者が瞬時に老化するということは現在の未来化、未来の現在化という現象が生じたとみることができる。それは現在の忘却と現在の執着として表現することもできる。過去と現在、未来は連続した時の流れであるが、それぞれは異なる時間であり非連続的でもある。浦島においてはそれらは同時的であり通時的であるとともに、連続的であり、かつ断絶的である。

空間に関してもそれと同じことが言える。同じ場所に行っても、そこは過去にきた空間と現実の空間とは異なる空間でありながら、それらは同時的であり併存しつつ連続している。遠い空間はそれが遠くにあればあるほど現実の空間とは異質に感じられるのかもしれないが、記憶と思い出、あるいはそれにとまなう憧れと賛美のなかでは異質的ではない。現実 is 幻想的ではなく現実的である。架空と現実とのアンヴィバレントな関係が時空間において展開する。

そのずれとアンヴィバレンスを解き放したのが玉手筐であるといえよう。その筐は時間を封じこめた筐である。時が封じこめられるということは、昔撮っ

た写真のようなものであるが、筐の中には何が入っているか分からない。筐は人の好奇心をそそる。開けてはいけないと禁止されれば開けたくなるのが人の常である。では筐とは一体何なのか。それは心身であり、感覚と意識ではないかと考えられる。筐に関していえば封じられた時間はそこから飛び出し、飛散していく。浦島の心身は禁止という封印を逃れ、自由になるが、そのために老化する。かつての感覚と意識は飛翔し、記憶と生きがいを喪失する。それは身体的に白髪になり萎えてしまうという変化だけでなく、見知らぬ人がいる故郷、故郷に帰ってきて故郷を見い出せない焦りと悲しみ、途方にくれて戸惑う状態である。それは社会的・精神的な変化として現われる。その状態を唱歌には「元居た家も村も無く、路に行きあう人々は、顔も知らない者ばかり」と表現している。身体の老化と孤独感に彼は苦しむのである。竜宮城における楽しみが多かったがゆえに苦しみは深くかつ重い。

もともと玉手筐は希望と期待を入れた筐であった。箱とは何かについてかつて書いたことがある。箱はものを入れるものである。ものを取り出せば無用になる。ゴミにならないような工夫が必要である。箱はまた情報やエネルギーを入れておく装置であり、人もまた箱を必要とする。旧約聖書によると、人類が救われて今日あるのもノア方舟 (Noah's Ark) のお陰であった。新生児には沐浴用の盥という箱が、死者には棺桶という箱が必要である。

浦島の筐は何のためのものだったのであろうか。彼が筐を開けたとたんには絶望を生むものと化した。箱というものは災いが入っているものと相場が決まっているのかもしれない。パンドラの箱 (Pandora's Box) がそうである。浦島太郎が筐を開けたのは、そこに宝物が入っていると思ったからである。だが開けた途端にそれが幻想であったということが判明した。筐は希望と期待を絶望と幻想に変えた。あるいはそれは部分的に記憶喪失の装置であったほうが良かったかもしれない。だが過去の時空間を忘れさせるという点では記憶喪失の役を果たしたと言えよう。さらに玉手筐は大切なものを入れておく筐であった。筐に入れる前に、人生において大切なものとは何かを考えなければならないであろう。過去において大切だったものは何なのか、それとも現在において、あるいは未来においても大切なものなのかを考えなければならない。それは過去志向的な人、現実志向的あるいは未来志向的な人によって異なるであろう。

玉手筐に入れる大切なものを入れ間違えるとどうなるのか。送り手は玉手筐に現在を入れたのであろう。だが未来であった。浦島は過去の時空を忘却したがゆえに未来という現実に戻り、老化したといえる。これは高齢社会の問題を提起していると見ることができる。

あるいは筐には大切なものとして過去と現在そして未来が同時に入っていたのかもしれない。そこで過去はとくにすぎさり、現在と思っていた時もすでに過去であり、未来が現在であるというタイム・スリップ現象が起きたのである。未来は夢見る時間でなく苛酷な現実であったのである。この話はわれわれが玉手筐に何を入れるべきかを問うている。玉手筐は架空のものであり幻想のものにすぎないと一笑するのは簡単である。だが今まで生きてきた人生を振り返りかえり、これから如何に生きるべきかに思うとき、自分にとって何が一番大切なのかを考えなければならないであろう。すくなくとも希望を入れた筐が絶望に変わることがないように、希望をかなえてくれることを期待したい。だが現実を見ると、高齢者になって年金の夢が破れそうな時代になってきている。夢が破れないように念じて生きることは大切であろう。もっと大切なのは夢を如何に実現すべきか考えることである。浦島太郎は約束を破ったから希望が絶望に変わったということになる。その過ちから、われわれは約束は守るべきであるということを学ばなければならないであろう。浦島伝説はそのようなことを教える話であるということもできる。しかし今日の日本では約束を破るのは企業であり、銀行であり、国家である。誰を信用すべきか、そしてどうすればよいのかを考えなければならない。

老いた浦島がその後どうなったかはこの話は伝えない。失意のうちにこの世を去ったのであろう。あるいは仲間を作り楽しい老後を過ごし天寿を全うしたのかもしれない。それは読む人の想像に任されている。この話は高齢者は如何にあるかを問いかけている。高齢社会を迎えた現在、浦島の話から何を学び、何を想像するかわれわれに問いかけているともいえる。

ボストンの旅は楽しかった。それは記憶を現実のものにしてくれた。忘却していたものを思い出させ、新しい思い出を作ってくれた。帰ってきて、旅を思い出すと、この旅もまた過去の思い出として記憶のなかに蓄積されていくであろう。その過程において記憶に残るものと忘れ去っていくものを作り出してい

くであろう。玉手篋から消え去るような思い出が少ないことを祈るのみである。それにつけてもこの20年ぶりの旅が本当にすばらしく有意義であったのは友人の暖かい配慮と気配りのお陰である。友人との思い出はいつまでも私の記憶に残るものとなることは間違いない。

(くらはししげふみ 佛教大学社会学部社会学科教授)